



ひらほく新聞

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

★フログひらほく通信★
 登録なしで携帯でも閲覧可能。
 当店からの各種お知らせや、ここに
 に効くお話等、ぜひご覧ください!!
<http://ameblo.jp/hirahoku/>

どうして 勉強するのか 働くのか あなたはどう答えますか

成績A pシステム&ペンシルゼミナール様主催、当社も協賛参加し、3月16日に厚木市文化会館大ホールにて行われた、作家・喜多川泰先生の講演会は、大ホールいっぱい皆様が集まり、「未来に希望の種をまこう!」というタイトルで盛大に行われました。

元々塾の先生でもある喜多川さん。将来を考える「中学三年生」に対して伝えたいという内容の、とても大切なメッセージを「公開授業」という形でたいへんに分かりやすくお話ししてくださいました。

素晴らしいお話をここにいくつかご紹介させていただきます。

「頑張つて勉強すれば、将来の選択肢が広がる。いい高校、いい大学に進んで、やりたいことができる」。学校の先生は、その通りにしてきた人だから、「夢の叶え方」としてそのように話すだろうが、それは一例でしかなく、自分の夢の叶え方は、自分しか知らない。

「働くこと」とは、「自分の時間をお金に換えて、そのお金を使って生活すること」。そう考えるとき、人生、時間には限度があるから、時間を売って報酬をもらうのでは限度がある。だが、「人を喜ばせて報酬をもらう」という考え方ならば、限度はない。

「働く本質」とは、自分の人生の時間を売って、替わりにお金をもらうのではなく、「人に、誰かに喜んでもらうこと」で報酬をもらうこと。

あまりにお金お金となりすぎず「働くこと」そして「勉強すること」の、「何のために」

喜多川 泰 きたがわ・やすし 1970年生まれ、愛媛県出身。東京学芸大学卒業。98年に横浜で、笑顔と優しさ、挑戦する勇気を育てる学習塾「聡明舎」として地域で話題に。2005年から作家としても活動を開始し、『賢者の書』にてデビュー。2作目『君と会えたから...』は8万部を超えるベストセラーに。その後も、『手紙屋』『手紙屋 蛍雪篇』『福』に憑かれた男、『心晴日和』など次々に作品を発表、『また、必ず会おう』と誰もが言った。』は10万部を突破し、各所で話題に。その後も『母さんのコロケ』、『スタートライン』と続き、最新作の『おいべっさんと不思議な母子』にて、全11作品となる。執筆活動だけではなく、全国各地で講演を行い、「親学塾」も、全国で開催中。現在も横浜市と大和市にある聡明舎で中高生を指導している。

を「自分の人生を使って喜んでくれる人の数を増やすこと」と考える。それをずっと続けていけば自然と報酬としてお金が入ってくる。さらにそれ以外に経験という財産や、いろんなものが自分に有り難く返ってくる。

愛媛県出身の喜多川先生は、高卒の18歳には家を出て一人で生きていくことと両親から暗黙で決められていたといえます。そして、大学受験は受けた5校をすべて落ちてしまい、浪人生として東京に行くことに。ホームでの見送りでは両親の涙眼を見て必死に堪えましたが、その後大阪に着く頃まで3時間ほど、しゃくり上げるほど泣き続けたそうです。その涙は、自分ももっとしっかり勉強しておけば、こんなことにならなかつたのにといい、両親に対しての申し訳ないという思い。そしてその時、絶対に親孝行するぞ!と固く誓ったそうです。もの凄なお話です。

その後、浪人生の一人暮らしから始まり、大学を出て、就職、塾の立ち上げ...と続いていくのですが、親孝行について、こんな風に話されていました。

初任給18万でも頑張つて仕送りをしてきた喜多川先生。親孝行と思つて続けていましたが、ご両親がもっと喜んでくれたことがありました。それは、書いた本を読んでもらったり、講演会でたくさんの方に聴いてもらったりして、たくさんさんのいろんな人に喜んでもらう姿を見せることだったそうです。親にとつてそれこそが最高に幸せな瞬間なんです!と語ってくれたお話は、まさに「人に喜んでもらう」という「働く本質」のキーワードに繋がります。

一番に感動した部分、なるほど!と唸つたお話は、夢・目標に向かう考え方についてでした。

「夢に向かつてと考える人には思わぬ落とし穴がある。それは最短距離でゴールを目指すこと!」

誰もがそのように考えてしまふと思うのですが、それは僅か一握りのイスのために誰かと争い、大多数の何十万人もの人がそのイス取りゲームに敗れ、夢も叶わないということ。叶つたとしてもそのイスも永遠の保障がないのが現在の世の中。ではどうするか。

喜多川先生は、実は作家を目指して今のようなつたわけではありませぬ。元々は理数系の数学者、そして塾で数学の先生となり、後に努力して英語も教えるようになってきたそうです。そして、その独特な内容が評判を呼び、大きな公開授業に繋がりを、本を書くようになったという作家としては異色の経歴です。

自らが歩んできた過去を踏まえ、もっと確実に夢を叶える方法があるとして喜多川先生は次のように教えてくださいました。

誰かと競争して数少ないイスを争うよりも、どうせ同じ場所に行くなら、遠回りをしていく。できるだけ面倒なことを、大変なことをたくさん経験してみる。そうして遠回りをすればするほど、争う人はいなくて、自分だけのイスを自分で作ることができる。

では、競争しない遠回りとは?最短距離を選ばない!取捨選択してはいけないということ。つまり、結果にこだわらず、目の前をやってきたものを精一杯楽しむこと。最終的にどこにたどり着くかわからなくても、「いまここに集中する」。そうして楽したら、自分の内側から沸々と湧いてくる「やってみよう」という気持ち。そして、さらに先に、まさか自分にこんな能力があるという場所にたどり着く。

そのために、必要なものは...

「人と出会うこと」。人と人との出会いとはただ単純に会うだけでなく、形のない思いと思いが出会っている。そして、「自分の人生を使って一人でも多くの人を幸せにしたいと願っている」そういう思いの人が出会うと必ず奇跡が起きる。

著書の超感動のベストセラー書籍『また、必ず会おう』と誰もが言った。この映画化について、まさに「同じ思いの出会いが生んだ奇跡」だとおっしゃっていました。

「一冊の本との出会いで人生は変わる」ということをこれまでの人生で何度も経験してきたという喜多川先生。講演後の懇親会でも、「誰かにとつて、自分の作品がそんな『人生を変える一冊』になれば」という思いを込めて全ての作品を執筆している」とおっしゃっていました。

まさに、人生を決めるのは「出会い」です。ここ数年、出会いが更に次の素敵な出会いに繋がるといふ素晴らしい体験をし、感動の連鎖に感謝の気持ちでいっぱいです。そしてこうして、出会った素晴らしい方々のお話や書籍、情報のご紹介(恩送り)を続けるようになりました。

人であり、本であり、どんな出会いでも、一歩踏み出せば、そこで何を学び、自分がどう変わるかがとても重要だと思えます。今回の講演会を主催された塾経営の帆足さんとのご縁も必然ともいえる有り難い出会いでした。お陰様で奇跡的な人の繋がりが生まれ、広がりました。

この講演を聴いてスイッチが入り、輝く未来の種をまくヒントをもらったたくさんさんの生徒さんがいます。可能ならば、素晴らしい感想文をぜひブログ等で紹介させていただきますと思います。



1,400円+税

映画化決定、9/28公開予定の、超感動大作、通称「またかな」。読書のススメ代表、清水店長も大絶賛。必ず泣けます。教え・学び満載です!

◎書籍より、
 「ごめんなさい」という言葉なんて、小学校以来言ったことがなかった。それは僕が悪いことをしなくなったんじゃない、ごめんなさい」を言う勇気をなくしていただけたことだ。

☆どの作品も、読書嫌い、苦手だという人でも思わず夢中になって引き込まれてしまう、名作ばかりであることをお約束します。喜多川ワールドへぜひ!

斎藤一人さんの心に響く言葉より…

何をしても波動が、ムードが重要だな。だから、ヘンな話、病人は病人らしくしちゃうから長引くの。ホントだよ。病人らしいムードが、病が長引く原因の一つだから、ムードをなんとかすりゃいいだよ。

「末期がんです」って、医者に言われてた人がいたの。その人、他のがん患者さんみたいに、一日中、ベッドに横たわってていなかった。毎日毎日、病院のまわりを胸を張って歩いてたんだって。そしたら、治っちゃったんだよ。ホントなんだよ。だから、病気がね。気持ちがマイったりしちゃうとダメな。

前にオレが入院してたときも、ただの点滴だとつまらないから、オレ、「先生、この点滴だと元気、出ないから、うなぎ入れて」とかって、ジョークを言うんだよな。そうすると、向こうもなれてきて、「斎藤さん、今日はスポンが入ってっからね」とかって言うのね（笑）。

そうやってジョークでも言って笑っていると、たいがいは治っちゃうね（笑）。やっぱり、病人は病人らしくしちゃうダメだね。

オレが入院してたとき、看護師さんとか先生が相談に来るの。患者のオレが相談にのって「元気、出そうよ」とかって（笑）。それで、オレが退院するっていうと、「さみしー」って、泣くんだよ、向こうの先生が（笑）。

それでさ、心と体は一つのものだ、っていうじゃない。だけど、心と体は別なんだよ。

「病気」っていうのは、「病を気にする」って。病に「気」がつくんだよ。体が病んだことを気にして、心も病んじゃって病気になるんだよね。だから、ほとんどの病人は、病に気がくっついた、病気もちなんだけど。

オレなんかの場合、ちっちゃいときから病弱だったけど、心が病んだことは1回もないの。そうすると必ずね、心に体がついてきて、治っちゃう。だから、病から「気」を離しちゃえばいい。体は

病んでも心は体の病を気にしなけりゃいいんだよな。だから、病になったら、できるだけ、楽しくなることを考えるの。考え方を考える、とは、そういうことをいうんで。それを、「わたしのどこが悪いんでしょ」って。あなたの、その暗い考えが悪いんだよ、って（笑）。『これまでしたことのない話』（斎藤一人&枅岡はなゑ）サンマーク出版

中村天風師はこう語った。「たとえ身に病があっても、心まで病（や）ますまい。たとえ運命に非なるものがあったとしても、心まで悩ますまい」

だからこそ、「どんな場合にも『こまった』、『弱った』、『情けない』、『腹がたつ』、『助けてくれ』なんていう消極的な言葉を、絶対に口にしないことです」と。

心は、発する言葉に大きく左右される。そして、雰囲気や気分といったムードに影響をうける。

たとえ、どんなにひどい状況になろうと、明るい言葉を発し、楽しいことを考える人でありたい。

母の死後 介護職員からの手紙

主婦 杉山 喜子 (60) 横浜市

アルツハイマー型認知症だった母が昨年12月、87歳で亡くなりました。

母は介護が必要になってから2年7か月間、週に4回、デイサービス施設に通いました。スタッフはいつも明るく迎えてくれました。私と夫の質問にも丁寧に答えてくれ、連絡帳を読むと、施設での母の様子がよく分かりました。

母が亡くなり、施設とは関わりがなくなったと思っていました。

しかし、2月末に届いた領収書には、「お二人の頑張りには頭が下がりました」と書かれた手紙が添えられていました。同じ頃、施設のスタッフからハガキが届き、母の笑顔や言葉を思い出していると書かれていました。

思いがけない便りを頂き、胸がいっぱいになりました。素晴らしい人々にお世話になることができたこと、改めて感謝しました。

(読売新聞2013/3/18 投書欄「気流」掲載分より)

先月、介護の現場を体験する機会があり、有り難く参加させていただきました。田舎の高齢の両親が入院を繰り返して、いよいよ施設等へのお世話になるかもという時期にあたり、いろんな意味でたくさんの学びがありました。障がいのある立場の方のいろんなケースでの、介護をされる側の体験はとても貴重でした。

私たちは産まれてきてしばらくは、両親や周りのたくさんの人たちに笑顔で囲まれていっぱいのお世話をしてもらって育ってきました。年老いていくということは、同じようなお世話を受けていくことでもあります。老人が老人を介護するという老老介護世帯や独居老人世帯の増加など、世界一の超高齢化社会に突入した日本の現状をはっきりと理解し、今後自らも老いていくなか、避けて通れない道をどう進むべきか、しっかりと自覚しなければならぬと強く感じました。

感動サプリ～「熊本の名校長・最後の授業」～

私が考える教育の究極の目的は「親に感謝、親を大切にすること」です。

高校生の多くはいままで自分一人の力で生きてきたように思っている。親が苦労して育ててくれたことを知らないんです。これは天草東高時代から継続して行ったことですが、このことを教えるのに一番ふさわしい機会として、私は卒業式の日を選びました。

式の後、三年生と保護者を全員視聴覚室に集めて、私が最後の授業をするんです。そのためにはまず形から整えなくちゃいかんということで、後ろに立っている保護者を生徒の席に座らせ、生徒をその横に正座させる。そして全員に目を瞑らせてからこう話を切り出します。

「いままで、お父さん、お母さんにいろんなことをしてもらったり、心配をかけたりしただろう。それを思い出してみろ。交通事故に遭って入院した者もいれば、親子喧嘩をしたり、こんな飯は食えんとお母さんの弁当に文句を言った者もおる……」

そういう話をしているうちに涙を流す者が出てきます。

「おまえたちを高校へ行かせるために、ご両親は一所懸命働いて、その金ばたくさん使いなさったぞ。そういうことを考えたことがあったか。学校の先生にお世話になりましたと言う前に、まず親に感謝しろ」

そして「心の底から親に迷惑を掛けた、苦労を掛けたと思う者は、いま、お父さんお母さんが隣におられるから、その手ば握ってみろ」と言うわけです。

すると一人、二人と繋いでいって、最後には全員が手を繋ぐ。

私はそれを確認した上で、こう声を張り上げます。

「その手がねえ！十八年間おまえたちを育ててきた手だ。分かるか。……親の手をね、これまで握ったことがあったか？おまえたちが生まれた頃は、柔らかい手をしておられた。いま、ゴツゴツとした手をしておられるのは、おまえたちを育てるために大変な苦労してこられたからたい。それを忘れるな」

その上でさらに「十八年間振り返って、親に本当にすまんかった、心から感謝すると思う者は、いま一度強く手を握れ」

と言うと、あちこちから嗚咽が聞こえてくる。

私は、「よし、目を開けろ。分かったや？私が教えたかったのはここたい。親に感謝、親を大切にすること、授業、終わり」と言って部屋を出ていく。

振り返ると親と子が抱き合っって涙を流しているんです。

※出典『致知』2011年1月号 特集「盛衰の原理」より（廃校寸前に陥っていた熊本の天草東高校をはじめ、6校の校長を歴任し、次々と教育現場の改革を図ってきた熊本の名校長・大畑誠也氏（九州ルーテル学院大学客員教授）のお話です）

☆別れと出逢いの春、それぞれの物語、記念日の思いを大切にしたいですね。

◎【3/17 登山家・栗城史多さんの感動の講演会】より

単独無酸素で、厳しい秋のエベレストへの登頂、冒険の生中継共有の挑戦をずっと続けている栗城さん。酸素ボンベがないと苦しいデスゾーンと呼ばれる高度7500mから先を登る際に、一番酸素を必要とするのはその3割を使うといわれる「脳」。そんな極度に苦しい時に脳が無駄な酸素を使わないためにするのが、「感謝の言葉」を口にするのだそうです。これまでの経験での「苦しみの3つの特徴」は、①闘っても勝てない ②逃げて追っかけてくる ③苦しければ苦しいほど、その先の達成感、喜びは大きい、だといえます。「ありがとう」の言葉を口にすることで、心が落ち着いてきて、より大きな力が発揮できるのだそうです。昨秋の挑戦で、両手指先のほとんどを凍傷で切断しなければならぬというほどの重度の負傷をした栗城さん。それでもなお「登山を続けたい」「絶対に諦めない」という強い意志・気持ちで「治したい、治るんです」と言葉で言い続け、その言葉のご縁で漢方の治療の方との出会いもあり、何と奇跡的にほんの少しづつですが新しい肉が出てきて、さらに今後最新治療を受けることにもなっているというお話を聴きました。左記、「栗城語録」を書いてみました。駄作ですが、「ひらほく新聞」の感想をいただきました。「感謝の気持ち」で筆文字ハガキをお返ししたいと思います。お待ちしております。



◎特別講演会「日本人の生き方」～学校では教えてくれない誇り高き日本の歴史と大和心～ 池間哲郎×白駒妃登美×小田島裕一

平成25年4月28日(日) 10:30～16:30 厚木市文化会館大ホール 大人 3500円(4/14迄早割 3000円) 大学生まで特別価格 1000円

池間先生、白駒さんは昨年、ひらほく新聞でもご紹介しました。これだけ著名な第一人者が集う講演会は滅多にありません。私たちは未来の子どもたちのために今こそ先人たちの生き様を学び、伝える使命があります。詳細は <http://kokucheese.com/event/index/77724/> ◎詳しいチラシ&チケット有・山本迄。